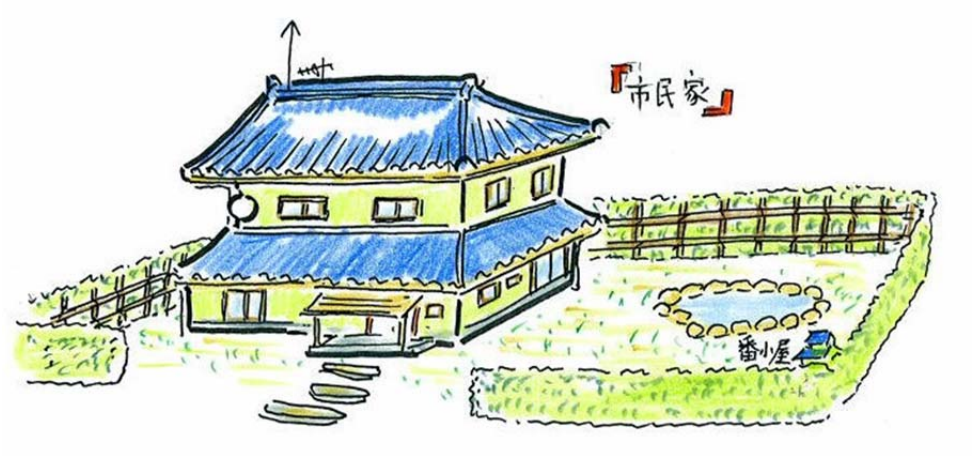
✦✦支援くんの火災予防奮闘記✦✦

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。

　そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

　点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！

援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

<u>主な登場人物</u>

援ちゃん　5歳

支援くん　　ご助（中間）

ミーちゃん（飼い猫）

ママ

パパ

閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.22

前号のあらすじ

　秋葉神社へ火伏詣でに出かけた「支援くん」を追い、秋葉神社に到着したご助は、内陣の獅子頭に驚き床下へ潜り込むと、同じく3日前から逃げ込み動けないでいた「支援くん」と再会する。

　内陣に置き忘れた旗指物と挟箱を取りに向かった二人は、神社の屋根から垂れ、途中で途切れた被雷針のワイヤーを見つける。切れたもう一方のワイヤーと合わせた瞬間、秋葉神社の祭神（獅子様）の進言を受けた雷神様の一撃を受け悶絶する二人。

　後刻、意識を取り戻した二人の前には秋葉様（雷神様）の使いの獅子様が･･･。しかし、ご助には獅子様のお姿が猫にしか見えなかった。

「こ、これご助、無礼であろう。秋葉の神様の使いのお獅子様じゃ。」という声の方を見ると同じように気が付いたばかりの旦那様が平伏しておった。

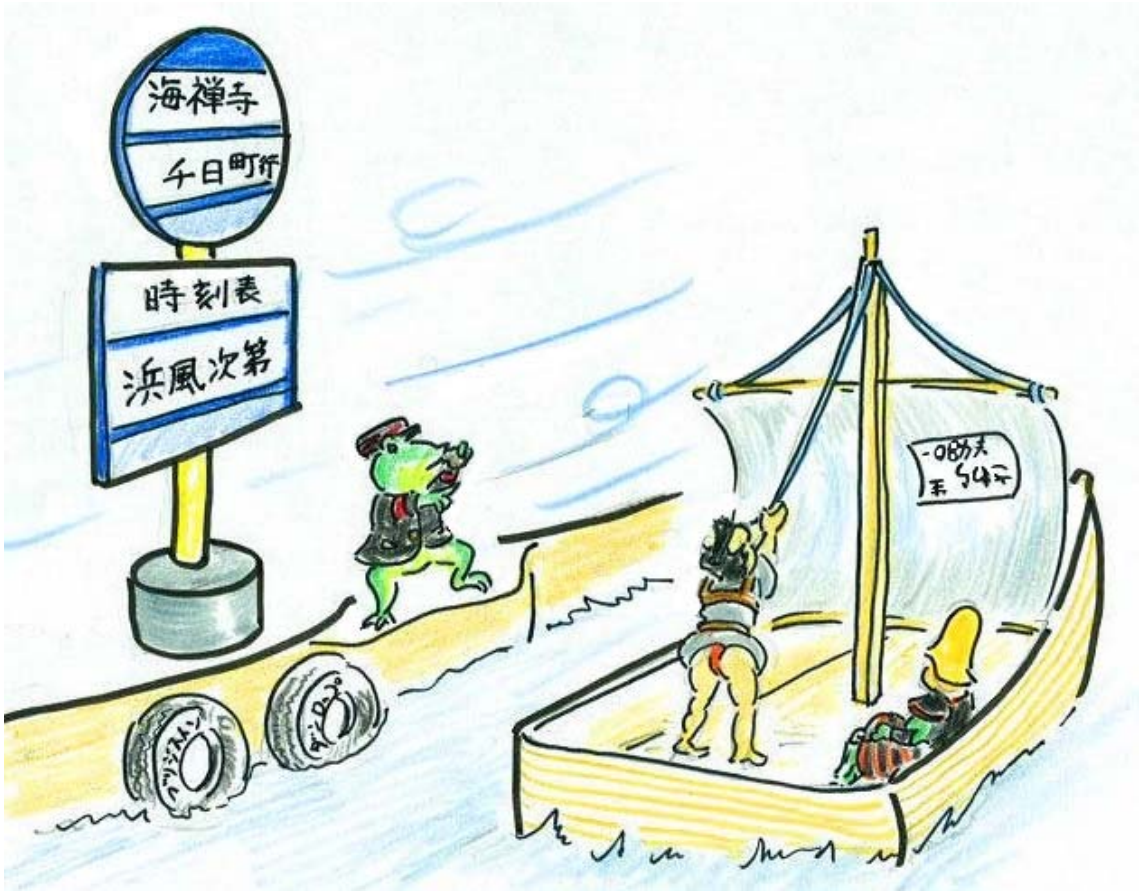
「秋葉の神様のお使い？旦那様、こりゃあただの猫殿ですぜ。」とあっしが申しますと

「馬鹿者っ。こちらは紛れもない秋葉の神様の使い。過日拙者の夢枕に立たれたお姿に間違いないのじゃ。」と旦那様は更に低く平伏されましたのじゃ。

「へへいっ。」あっしが旦那様より低く平伏すると猫殿、いや、秋葉の神様の使いは

『ことん』と旗指物と挟み箱を置くと　サッ　とそのお姿を消されたのじゃ。

後に残された旦那様とあっしは、お互いの情けない姿を笑いあうと、金石温泉でひと時を過ごし、翌朝の浜風を待って犀川を遡り、昼過ぎには主家のお屋敷へと戻りましたのじゃ。



「やっと帰って来れたのぉ。」と旦那様が嘆息なされるのも待たず、あっし達を見つけた姫様から

「ちえんにぼすけ、二人して援を放っておいてどこに行っていたのぢゃ！」とお叱りをうけましてなぁ。

「姫様、これには長い・・・」と旦那様がお話される間、あっしは姫様の膝の上でゴロゴロと喉をならすミー殿をみていて気が付きましたのじゃ。

「ミー殿は・・・秋葉様の使いでは？」と。

「ミーちゃんもさっきまで居なかったの。みんなで援を独りぼっちにちて。援ちゃんは怒ったんだから！」とまくしたてる姫様の膝の上からあっし達を見下ろしていたミー殿が一言

「にゃにゃにゃにゃあん（ご苦労じゃった。）」と申したようで。

「だ、旦那様？あ、あれは・・・やはり秋葉の・・・。」

「う、うむ・・・。」

「ど、どうするんです？また雷様に・・・。」

「ううううむ・・・。」

「だ、旦那様、どうするんですよ？気軽にミー殿とか言えないですぜ。」

「そ、そうじゃな・・・まず、お、お屋敷の避雷針を確認してじゃな・・・。」

「へ、へい。避雷針を確認して、そ、それから？どうするんです旦那様？」

「そ、それからじゃな・・」

「そ、それから？」

「それから、金輪際ミー殿に臍を見せないことじゃな。」

「・・・へそ？・・な、なんじゃそれ？」と呆れるあっしをよそに、

「ドドーンッ」と突然、指鉄砲をミー殿に向けた旦那様が叫ばれたのじゃ。

「ひいぃっ」と必死に臍を隠すあっしを見ながら旦那様がけらけら笑うもので

「お、驚かしっこなしですぜ！」とあっしが怒りだすと

「ご助よ、見てみい。拙者の大声で逃げ出したんじゃ。ミー殿は秋葉の神様のお使いではなかろう。」と旦那様。

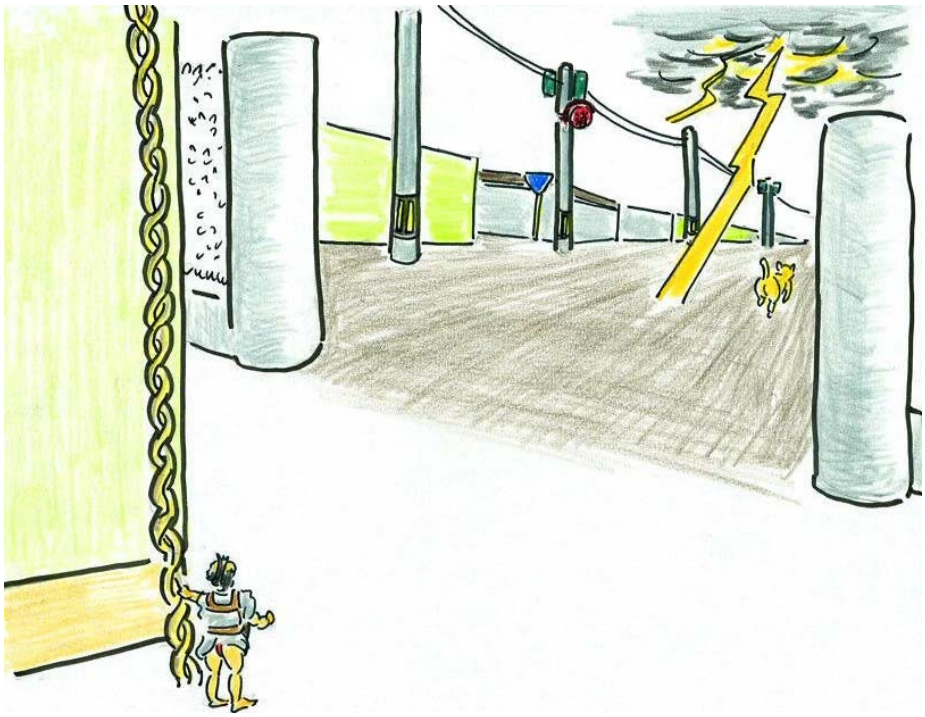
「みー、待ってどこ行くの？」と慌ててミー殿を追ってゆく姫様を見ながら

「ですな・・・。では、旦那様、あっしはお屋敷の避雷針を見てきますぜ。」

とあっしはお屋敷の庭に出たのです。

その時、ミー殿が逃げ去った方角で　『ベカッ』　と夏空を切り裂くような稲妻が走りましてな、その閃光の中、ミー殿の姿が秋葉様のお使いへと変わったように見えたのですじゃ。

「・・・ぅ、うん。見なかったことにしよう。」と心に決めたあっしは旦那様には黙っておることに致しましたのじゃ。



ただ、それからは用心のため、旦那様には内緒で臍をガードするアース線を持ち歩くことと致しましたのじゃ。ほれ、今日もこのように。

あとはミー殿が旦那様にドドンと喰らわしてくれれば・・・。こりゃ楽しみじゃと自然に笑みがこぼれてしまいましてな。

「どうしたご助。何か楽しいことでもあるのか、妙な笑い方をして？」

「へ？・・・いえ何も・・・ささ、旦那様見なせえ、今日も大きな入道雲が。避雷針の点検に参りましょうぞ。」

「本当じゃな。何時ぞやのようにまた　ドドーン　と来るかの？」

「そうですな。来て欲しいですなぁ。　ドドーンと。ははは、ドドドーンと。」

「本当に嬉しそうじゃの？此れほどに嬉しそうに踊るご助はついぞ見たことが無いのぉ。」と述懐される旦那様をよそに

「あっ、ほれ。ドドンがドン！ドドンがドン！」とあっしは一心に雷寄せの舞を踊りましたのじゃ。

　その甲斐あってか遠くから雷鳴が‥それが段々と近づいてまいりまして･･･。

「あっ、ほれ。ドドンがドン！ドドンがドン！」と踊り続けながら旦那様を見やると

お屋敷の庇の下であっしを指さしながら何かを叫んでおいでじゃった。

「さ、さあ雷様ぁ旦那様目掛けて・・それ、ドドンがドン！ドドンがドン！」

と踊るあっしの耳に旦那様のお声が

「ご助ぇ。そちの背中から針金が出ておるぞ。」と･･･背中？針金？･･･？？

まさか？

と後ろを見ますれば・・・人を呪わば穴二つの例え、あっしの背中から隠しておいたアース線が真上に、そう避雷針のように天空に向け飛び出しておったのじゃ。

「な、南無さん・・。」その刹那、あっしは己の運命を悟ったのでございます。

「危ないぞご助！雷様が近づいておるぞ、早く家に入れ！」の旦那様のお声で我に返ったあっしは

「だ、旦那様っ・・・お助けを！」とお屋敷の庇の下の旦那様を目掛け、駆け出したのじゃ。

いや、実際には駆け出そうとしたのじゃ・・・。その刹那、『ドドドン』という大音響の中、あっしの全身を真っ青の光が突き抜け、えも言われぬ激痛が走ったのですじゃ。

光の中であっしは悟りましたのじゃ、これは神罰じゃと。

皆々様よ、人を呪わば・・・。今回のあっしの体験を無駄にしないでおくんなまし。

（令和４年 10 月号へつづく）